

## 佐喜眞興英の東京での宿所、住み処

稲 福 日出夫

### はじめに

佐喜眞興英(1893-1925)は、1913(大正2)年3月20日、今でも語り草になっている「一中創立以来の優秀な成績」で県立第一中学校を卒業する。しかし、卒業後の進路選択については、すんなりと一高、帝大へと進むべく上京したわけではなさそうだ。或る意味で、かつてグリム兄弟が、ヘッセンからハノーファーへ「軽い心をもってではなく、重い心をもって」移住した時の心境と同じように、内に様々な葛藤を抱えながらの上京であった、と思われる。そして、ハノーファー王国のゲッティンゲン大学では、グリム兄弟にとって予期せぬ出来事、「ゲッティンゲン七教授事件」が起こる。佐喜眞の場合もまた、郷里にいた頃には思いもよらなかったであろう出会いが、東京で彼を待ち受けていた。誰にとっても、出会いがあり別れがある。おそらく、人生行路といったものはそういうものかもしれない。

本稿では、佐喜眞が上京後の宿所にして玉名館、日独学館の雰囲気を紹介したい。住み処というのは、日々寝起きをする場であり、大なり小なり、誰もが、そこに入出入りする者、居住する者たちから影響を受けるであろう。が、佐喜眞にとっては、殊更にそれが大きかったと思われるからである。

先ず、上京前の佐喜眞を取り巻く状況から始める。

### 第1章 幻に終わった郷土での教師の道、そして上京

— 「年譜」<sup>1</sup>の1912(明治45)年の欄に、「貞子の夫、花崎為康の話」として次のような記述がある。

---

<sup>1</sup> 佐喜眞道夫編「年譜」『女人政治考・霊の島々<佐喜眞興英全集>』(新泉社、1982年)所収、528-534頁。

「両親『卒業したら二部（師範学校）に行ってお学校の先生になりなさい』、興英『私がもし二部に行ったらノイローゼになりますよ。私には行きたくない所が、あります』、興英、一高進学を両親に認めさせる」。

1912年といえば、佐喜眞が一中の最終学年を迎え、卒業後の進路に迷っていた時期である。その頃、佐喜眞の一粒種、貞子さんはまだ生まれてない。貞子さんが生まれたのは、佐喜眞が一高に入学した翌年、1914（大正3）年1月のことである。そして、女子が尋常科を終え、さらに上級学校に進学することの稀であった当時の沖縄にあって、貞子さんは普天間尋常小学校を修了し、県立一高女に入学した。1925（大正15）年のことであり、佐喜眞が津山で亡くなった翌年にあたる。先のエピソードを、貞子さんは母親のウタさんから聞いたのであろう。

このエピソードには、養父佐喜眞加那と養子興英の父子の葛藤、興英の妻ウタさんの苦悩が滲み出ている。

振り返ってみれば、佐喜眞は幼少の頃、生家も近くにあったとはいえ、本家筋の首里畑の養子に入った。養父加那は、勉強途中で本家を継がなければならなかった自らの苦い経験もあってか、佐喜眞の教育にかんしては、周りもびっくりするほどの熱の入れようであった。そして、佐喜眞も、小学校中学校に通うなか、養父加那の期待に答えていた。十分すぎる程、応えたのであった。そして、加那も、佐喜眞がなお勉学を続けたいというのであれば、師範学校二部へ進み、ゆくゆくは郷里の教育界で活躍してほしいと願っていたのかもしれない。佐喜眞が郷里を離れることなど考えていなかった。彼を養子として迎え、また彼が中学三年のとき、同じ新城村のウタさんと「両親の決めた縁組」によって家庭をもたせたことも、煎じ詰めれば、豪農であった首里畑の家系や財の継承を彼に期待した、ということであろう。そして、結婚したといっても、おそらくウタさんは首里の佐喜眞の下宿と一緒に暮らすというのではなく、新城村に留まり、養父母のもとで使用人らと共に農作業に勤しみ、週末に帰省する佐喜眞を首を長くして待っていたのであろう。

沖縄県師範学校は、予備科（修業年限一カ年）、本科第一部（修業年限

四カ年）および本科第二部（修業年限一カ年）があり、本科第一部は予備科を修了した生徒たちが入学した。それに対して本科第二部は中学卒業生を入学資格とする課程で、佐喜眞が一中を卒業する前年度より、一中卒は無試験で入学できた。佐喜眞と同じ一中の25期卒、71名の生徒のなかで26名が師範二部を志望している。実際また、沖縄県師範学校の卒業生名簿をみると、大正3年3月に卒業した本科第二部の生徒32名のうち、大正2年に一中を卒業した佐喜眞の同期生が24名もいる。<sup>2</sup> 当時、小学校への就学率の上昇に伴い、学校施設の改善が急務となり、また小学校の教員不足は深刻であった。

進路選択にあたっては、佐喜眞は、一中の恩師清水駿太郎に幾度も相談したことであろう。清水は、佐喜眞に一高、帝大への道を勧め、叱咤激励した。そこには、教師が他府県出身なのか、それとも沖縄県人なのかどうか、さらにまた、高師出身と帝大出身の教師のタイプの違い<sup>3</sup>も、あるいはあったのかも知れない。

後年のことになるが、清水は、柳田國男のいわゆる「海南小記」の旅で柳田が1921（大正10）年1月5日に沖縄に来た際、着いたその当日に柳田の宿舎を訪ね<sup>4</sup>、佐喜眞の将来を「慈父の如き情熱を以て」依頼している。佐喜眞の帝大卒業直前のことである。また、佐喜眞の遺著『女人政治考』（岡書院、大正15年）に寄せた柳田の「小序」によれば、柳田は、佐喜眞の訃報に接し、「今に於ては先生は寧ろ、（略）故郷の島に留まって、安らかな読書子の生涯を送らしめなかったことを悔いて居られるかも知れぬ」<sup>5</sup>と、佐喜眞に対し熱心に東京行きを勧めた清水先生的心情を慮っている。

<sup>2</sup> 『会報・昭和十年八月現在』（龍譚同窓会、昭和12年）31, 32頁。

<sup>3</sup> 帝大卒業生と高師卒業生の「教員としての資質」や教育課程の違い、またキャリアの違いが彼らの精神形成に及ぼす影響などにつき、山田浩之「旧制中等学校教員のリクルート — 帝国大学文学部卒業生を中心にして —」（『松山大学論集』5巻5号、1993年）は示唆に富む。また、麻生誠『日本の学歴エリート』（玉川大学出版部、1991年）参照。

<sup>4</sup> 酒井卯作編『柳田國男 南島旅行見聞記』（森話社、2009年）54頁。

<sup>5</sup> 前掲『女人政治考・霊の島々』12, 13頁。

二 佐喜眞が一中を卒業する前年度の入試日程では、一高から八高までの入試出願期日は「六月十五日限り」であった。体格検査が7月上旬にあり、選抜試験が7月中旬に行われている。<sup>6</sup> 佐喜眞たちが受験する翌年度の入試日程も、これと左程の違いはないと思われる。

佐喜眞は、卒業式を終えた後、7月の一高の入試前まで沖縄を出発していない。つまり、一中での学友島袋光裕が、一中卒業後、志を抱いて上洛したが道半ばで京都を出て東京に辿りつくまでの数ヶ月間、佐喜眞は郷里新城に留まっていた。そして、佐喜眞がいよいよ上京しようとする前後と思われる6月12日（「年譜」の旧5月8日）、養父加那が亡くなった。享年64歳。19歳の佐喜眞に首里畑の養家を背負わなければならない重責が生じたはずである。しかし、その頃の「年譜」にウタさんの話として、「養母カマは『お父さんは、勉強途中で家に引きもどされて、フラーになった。だから興英には、勉強したいというだけ勉強させる』と話していた」と記されている。夫を亡くした直後にもかかわらず、一人息子の心中を汲んで佐喜眞の背中を押す養母カマの心配り、夫の上京後の首里畑の家を切り盛りし、学費の工面などに思いを巡らす妻ウタさんの胸中が察せられる一文である。

三 佐喜眞にとって、一中を首席で卒業したものの、その心境は揺れ動き、身辺も慌ただしかったにちがいない。結局、彼は郷土に留まるという選択肢を取らず、上京した。

そして、そのことによって、佐喜眞に新たな人々との出会いが待ち受けていた。穂積陳重、柳田國男、瀧川政次郎がそうであり、また、永原マツヨさんがそうであった。それについては後に触れる。しかしまた、「出会い」というのは「出会うべくして出会った」といった面がなくもない。沖縄出身で上京し進学したひとは、それこそ何百人といただろうし、また、そのなかで帝大法科大学まで進んだ幾人かの学生も、やはり穂積の講義を

---

<sup>6</sup> 一中学友会誌『球陽』（21号、大正元年）149頁。

聴いている。が、その佐喜眞の先輩たちの皆が皆、穂積の進化論や法学的世界観に共鳴し、その後の人生の処し方にまで及ぶ影響を穂積から受けたわけではあるまい。佐喜眞は、穂積先生の期待に添うべく、「女人政治考」の原稿を5度も書き直さなければならなかった。そしてまた、柳田やマツヨに会わなければ、『女人政治考』が世に出ることはなかったであろう。そうではあるが、しかしまた、上京せずとも『南島説話』や『シマの話』は、まったく別の姿で、我々の前に現れることは大いにあり得た。佐喜眞は大学卒業後、一度も沖縄に帰ってない。

## 第2章 上京当初の宿所、玉名館

一 佐喜眞と同期で一中を卒業した島袋光裕が「東京は中学五年のとき修学旅行でできたことがある」と、「自叙伝」に記している。大正2年3月、島袋は一中を卒業すると、先ず、北辰一刀流の師範内藤高治の門を叩くため、京都へ出発した。その後東京へ向かったのである。「母には『東京で勉強するから』と言いふくめて、内藤師範の門をたたいたが、剣道の世界は、想像を絶するほどに厳しく、毎日が血をはくほどの苦しさであった。二月月はまたたく間に終わってしまったが、とうとうたまりかねて、私は夜逃げ同様に無断で道場をとび出した。大正二年の初夏で、京の道には、まだつゆが残り、狭く立ちならぶ軒には冷気が含まれていた。夜が白々と明けるころから早や小鳥が鳴いているのが、何となく悲しかった」<sup>7</sup>と彼は語る。東京で、島袋は「修学旅行で知り合になった神田三崎町の玉名館に下宿した。主人は熊本の人で長女が荒木繁子、次女が荒木郁子といって、青鞥社同人平塚雷鳥と共に活躍した女傑」であった、という。<sup>8</sup>

佐喜眞は、島袋光裕を頼って上京した。彼は郷里にいた頃から、那覇を

<sup>7</sup> 島袋光裕『石扇回想録』（沖縄タイムス社、1982年）29, 30頁。

<sup>8</sup> 島袋光裕『『女人政治考』の佐喜眞興英君』『養秀 創立八十周年記念』（1961年）所収、113頁。なお、島袋がこの回想記のなかで、佐喜眞が一高に入学したのは「大正三年である」と記されているが、それは誤記である。同書、114頁、参照。

出た島袋と連絡をとりあっていただけにちがいない。

島袋が玉名館に落ち着いた頃、そこへ突然電報が来る。「何時新橋着、ムカエ」。佐喜眞が島袋を迎えを頼んだのである。新橋駅に「ロバーのような長い、特に目立つ浅黒い、シマの顔がプラットホームに現れた。それこそ『ドウシンデーウマーラン』思いがした」と島袋は述懐している。「ロバー」とは佐喜眞の中学時代のニックネームである。新橋駅に降り立った佐喜眞の姿を想像すると微笑ましい。玉名館にたどりつき、不細工に括りつけられた3個の竹皮の行李を開けると、中からよれよれの蚊帳、煎餅布団、飯茶碗、庖丁、まな板、そのうちランプも出て来た、という。

東京生活の初日、昼食をすませると、佐喜眞は、フツといなくなり、晩の八時ごろにやっと帰ってきた。心配して待っていた島袋が理由を尋ねると、「歩き歩き上野公園を探し、通りがかりの外人をつかまえて英会話の練習をしたが、失礼な奴といわれてしかられた」との返事がかえってきた。

そうした、いわば常識、世間知を越えた性質は佐喜眞の生涯にわたって付着しているように思われる。<sup>9</sup> ともかく佐喜眞も玉名館に落ち着き、7月に実施される一高入試に備えることになる。おそらく、一高に入学するまで佐喜眞もそこに投宿した。もし、佐喜眞が一中の五年生に進級する3月から4月にかけて実施された修学旅行に、島袋とともに参加していたとすれば、東京での当初の下宿先は、彼にとってまったく見知らぬ住み処でもなかったということになる。

佐喜眞は、ここでしばらく島袋と一緒に過ごす。二人は東京でも碁盤を囲んで楽しむことがあった。島袋が回想している。「同じ下宿で毎日顔をつき合わせている関係で時々彼に碁の手ほどきをやった。当時私は十二三級位の碁だったかと思う。暫らく下宿は一所だったが通学の関係で

---

<sup>9</sup> 源武雄は、養秀同窓会が発行した『沖縄の教育風土記』（1971年）の「自由主義の息吹き（大正期）」を担当した。その執筆にあたって、彼は島袋光裕から聞き取りを行なっている。島袋によると、佐喜眞は「成績は中学創始以来抜群で秀才の見本だったが、また奇行の持ち主で友人達を驚かした」という。源武雄「思い出すことなど」『日本民俗誌体系 第一巻 沖縄』月報（角川書店、1974年）14頁。

（島袋は早稲田に進学する—引用者）別れ別れて暫く会わなかった。或る日彼がひょっくり訪ねてきたので碁盤を持ち出して向ったら半年たらずに、手を取って教えた彼に私が黒を持たされるようになったのだ。いくら口惜しがつても齒が立たなかった事を今だに忘れず、時に碁の話が出たら誰彼に話すことがある」。<sup>10</sup>

二　ところで、この「荒木郁子の玉名館へ投宿」した出来事を、我部政男は佐喜眞と女性解放思想との「宿命的な邂逅」と捉え、重要視する。「初めての東京で、しかも個性豊かな人々との接触が佐喜眞の内部に、ある確かな衝撃を与えたのである。私はこの玉名館での体験は、感じやすい佐喜眞に女性解放問題を考える直接的な契機を与えたものと想像している」。<sup>11</sup>

荒木郁子の略歴を記す—。郁子の父親、荒木官太は熊本県玉名郡八幡村（現・荒尾市）の出身である。彼は、郷里での生活に見切りをつけ、20歳前後の若さで上京する。その後、紆余曲折あるが、1894, 95（明治27, 28）年ごろ神田三崎町に玉名館を開業する。旅館名の由来について、「官太は望郷の思いを込めて、建造した旅館に『玉名館』と名付けた」という。<sup>12</sup> その父親が1910（明治43）年に亡くなり、その跡を継いだのが、娘の郁子であった。郁子は1890（明治23）年生まれであるから、20歳前後で神田の玉名館の女将になった。また、佐喜眞との年齢差でいえば、郁子が3歳年上ということになる。

荒木郁子が「青鞥」とかかわるようになったのは、平塚らいてうを後押しした保持研子が1911（明治44）年3月に玉名館に宿泊したのがきっかけであった、という。二人は文学談義で盛り上がり、その後しばらくして、研子が「文学おかみ」の郁子を平塚らいてうに引き合わせた。同年9月1日、『青鞥』の創刊号が出る。郁子は、青鞥社の創立当初の社員18人のな

<sup>10</sup> 島袋光裕、前掲『『女人政治考』の佐喜眞興英君』、114, 115頁。

<sup>11</sup> 我部政男「夭折と苦悶の人・佐喜眞興英—その状況と課題」前掲『女人政治考・霊の島々』「解説」所収、505, 506頁。

<sup>12</sup> 中尾富枝『「青鞥」の火の娘—荒木郁子と九州ゆかりの女たち—』（熊本日日新聞社、2003年）31頁。

かのひとりであった。彼女は、『青鞥』創刊号に「陽神の戯れ」(戯曲)を書いている。佐喜眞が「玉名館」に投宿する2年前であり、彼が修学旅行に参加していたのであれば、その前年ということになる。

雑誌の発刊にあたっては常に付き纏う問題であろうが、しかも「お嬢さん育ちの多かった」女性だけの手によって創刊された『青鞥』にあつてはなおのこと、経済的問題は創立当初から見通しの立たない悩ましい難問であった。島袋や佐喜眞がそうであったように下宿生を何名もおき、また、保持研子母子のように地方から上京した宿泊客や、修学旅行生(一中もそのなかに含まれる)を受け入れる玉名館の収入は、青鞥社にとって心強かったことだろう。青鞥社員にとって「彼女たちは玉名館にさえ行けば何の心配もなくともかく好きな酒やビールと酒肴だけは目の前にできたのである」。<sup>13</sup> さらに、1919(大正8)年に平塚らいてうは「新婦人協会」を設立する。この協会においても郁子は当初からの会員で、運動資金面で援助している。郁子の性格にも因るであろうが、岩野泡鳴、また故郷(熊本県玉名郡)を同じくする宮崎民蔵なども玉名館を「定宿」にしていた。平塚らいてうが書いている。「玉名館に出入りしているのはただ文士連中だけでなく、こうしたある種の社会運動家のグループがあることを知りました。宮崎民蔵の弟、宮崎滔天の関係からか、亡命してきた中国革命の志士を泊めたり、じつに多種多様な人物が出入りしている不思議な旅館であるのにも気付きました」。<sup>14</sup>

玉名館は大正12年の関東大震災でなくなったが、その後、規模をだいぶ縮小して再建された、という。<sup>15</sup>

---

<sup>13</sup> 同書、81頁。

<sup>14</sup> 平塚らいてう『元始、女性は太陽であった—平塚らいてう自伝』②(国民文庫、1992年)17, 18頁。

<sup>15</sup> なお、ここで私が典拠とした中尾富枝は、「郁子はどのような小説を書いたのであろうか。青鞥研究のなかで郁子の作品研究は少ない。郁子が焦点を当てられるのは玉名館の女将としてであり、『青鞥』を最初に発禁にした張本人であるということであり男性遍歴を重ねた女としてであった」と述べ、郁子の作品そのものの分析、考察をおこなっている。と同時に、晩年に至るまでの郁子の生涯を、彼女に寄り添うように丁寧に描いている。その著で郁子にあつた章「マドンナの闇」の末尾は、こう綴られている。「郁子は多くの男性を愛して生きた。

この章の冒頭で、「主人は熊本の人で長女が荒木繁子、次女が荒木郁子とって」という島袋の回想を引いた。島袋の記す繁子とは滋子のことで、島袋や佐喜眞が玉名館に投宿していた頃は、郁子とともに旅館を仕切っていた。二人の間には、つまり郁子のすぐ上の姉に亥年子（イネコ）がいたが、1899（明治32）年に12歳で、つまり島袋が来るずっと以前に亡くなっている。また、郁子の下には、弟の東一郎と二人の妹がいる。長女滋子もまた、「青鞥社」に深くかかわっており、また萬朝報の記者をしたこともある。滋子のことはまた後に触れる。

三 「青鞥社」は玉名館を根拠地として発足した。そして、佐喜眞の上京する2年前に『青鞥』は創刊された。佐喜眞たちが寝起きする大きな旅館兼下宿屋に、彼らにとって不思議な女性たちが出入りし、彼女たちは、時折、酒も加わって熱く議論していたことだろう。そこで、我部政男は「くしくも佐喜眞の上京はその渦中に身を投じることとなったのである。平塚らいてうと行動をともにしていた荒木郁子の玉名館への投宿は、この運動（女性解放思想）との最初の宿命的な邂逅となるのである」<sup>16</sup>と強調する。なるほど佐喜眞にとって、この旅館のもつ雰囲気は「衝撃的」であり、彼の思想形成において、確かにひとつの「契機」になったであろう。が、いずれにせよ、そこで見聞きした体験が彼の内面で具象化していくのは、一高を卒業し帝大に入学した後のことのように思われる。その「原形像」が玉名館にある、ということである。

---

玉名館の女将という立場にあって、経済的基盤を固めることができない当時の文学者や芸術家を、その屋根の下でなんらの不安もなくしのげる場所と食を提供して守り育てた。中国の革命に奔走する男たちをもその羽根の下にかき寄せて暖めた。日本の女たちが初めて本音を発して行動を起こしたとき玉名館はその根拠地となった。堀場清子氏は玉名館を女たちの『航空母艦』と称した。玉名館すなわち、郁子は『青鞥』に身を捧げた。」そして、「その屋根の下に暖められた人々は夢か幻であったかのように何も語ることはなかった。郁子もそれを望んではいないであろう。ただ、玉名館という旅館があってこそ日本の近代女性史の原点である『青鞥』が世に出たことを私は忘れたい」と結ぶ。中尾、同書、82頁、123頁。

<sup>16</sup> 我部政男、前掲論文、505頁。

後年のことになるが、佐喜眞が帝大学生の頃の1920（大正9）年4月、『琉球新報』に寄せる論稿を執筆していた折、東京市電の罷業、600人が首切りにあう出来事があった。その新聞記事に対し、彼はそれを淡々とメモ書きする。そして、「ヤー今日は学生の怠業だとキメ込んでユルユル雪景色を眺めつつ本稿を草する。綿入を着込み火鉢を抱え火箸をいぢりつつペンをとる。又一興なきにあらずだ」<sup>17</sup>と綴る。

そうしたことから推し量ると、佐喜眞は、政治の季節にあつて、たとえば青鞥社員のようにリアルな政治の動きに直接参加するというのではなく、そうした動向が歴史の流れのなかでどう位置づけられ、加えてまた東京と郷土とのテンポのズレ、その由来を探るといった、いわば学究的姿勢を常に保っていたように思われる。<sup>18</sup>

上京した頃の佐喜眞の心中には、養父加那を失った直後のことでもあり、ウタさんと共に旅支度をし、それを柳行李に詰め込んで郷里を出たときの光景、那覇の栈橋での複雑な思いが幾重にも重なっていたことであろう。そのようなあれこれを思い煩いながらも、ともかく目前に控えている一高受験に備えるべく机に向かっていた、というのが玉名館に投宿していた頃の佐喜眞の実像かと思われる。実際また、佐喜眞が玉名館にいたのは、長くて2、3ヶ月間で、一高合格後は、一高が全寮制であれば自治寮に移っているはずである。

### 第3章 一高から帝大へ

一 佐喜眞は、1913（大正2）年9月、第一高等学校に入学する（「官報」第304号、大正2年8月4日）。第1部丙類独語法律科であった。

当時の一高は、第一部が文科、第二部は理科、第三部医科、であった。

第一部甲類；英語法律科、政治科、経済科、商科、

---

<sup>17</sup> 佐喜眞興英「琉球の祖先崇拜を論ず」前掲『佐喜眞興英全集』所収、447頁。

<sup>18</sup> なお、拙稿「郷土の法学者 佐喜眞興英の生涯」『うまんちゅ法律講座（沖縄国際大学公開講座19）』（東洋企画、2010年）所収、274-275頁参照。

第一部乙類；英語文科、  
第一部丙類；独語法律科、政治科、独語文科、  
第一部丁類；仏語法律科、政治科、仏語文科、  
第二部甲類；工科、  
第二部乙類；理科、農科、薬学科、  
第三部独英；医科。

佐喜眞は一高時代、語学はかなり真剣に学んだ様子で、「独語講読」「独語作文・文法」「英語」ともに「優」である。

しばしば語られるように、旧制高校では外国語の授業数が多く、まるで語学学校のようなものであった、という。上に記したように、旧制高校では文科と理科に大別されるが、「文科を例にとると、第一外国語（中学校で履修した語学—多くは英語）は第一年次・週 11 時間、第二、第三年次・各週 10 時間、第二外国語（多くは独仏）は各学年次・3 時間となっている」という。<sup>19</sup> 佐喜眞は「第一部丙類」なので、英語とドイツ語の比重は逆になっていたであろうが、それにしても語学にかなりの時間が割り当てられていたことがわかる。さらに、「夏目漱石の『三四郎』の広田先生のモデルとされ、『偉大なる暗闇』と綽名された」<sup>20</sup> ドイツ語教師岩元禎が、当時、一高に在職していた。大正 3 年、つまり佐喜眞の 1 年後に一高に入学した畑耕一の回想が残されている。それによれば、「やがて教室に岩元先生が入って来、学生の顔を見渡すと、開口一番、——俺がドイツ語を教える。俺が落第さす。誰が何と言おうときつと落第さす」といった調子であったようだ。岩元の授業を佐喜眞が受講したかどうか確認できてないが、そうした雰囲気の中、佐喜眞はドイツ語や英語など語学はすべて「優」でとおしている。

また、森鷗外の「自伝体小説」といわれる『ウィタ・セクスアリス』には、「僕は本郷壹岐坂にあった、ドイツ語を教える私立学校にはいった。これ

---

<sup>19</sup> 宮永孝『日独文化人物交流史—ドイツ語事始め—』（三修社、1993 年）342 頁。

<sup>20</sup> 同書、361 頁。

はおとう様が僕に鋤山学をさせようと思っていたからである」<sup>21</sup>という場面がある。これは、後に触れるシュピンナーが1887(明治20)年4月に壱岐坂に開設した「新教神学校」のことである。この神学校の最初の学生は、三並良、向軍治の二人で、一年後に丸山通一も加わり三人となる。その三並良は、その後、普及福音教会最初の日本人牧師として活動するかたわら、1908(明治41)年から11年間、一高教授の職にあり、そこでドイツ語を教えていた。佐喜真の一高在学期間と重なる。

この神学校は、創設されて4年後には小石川上富坂に校舎を建てて移ることになる。後年、佐喜真はそこで日常的にドイツ人宣教師から、ドイツ語を教わることになる。

佐喜真は、第一部丙類独法科であったので、三年次配当の「法学通論」では、末弘巖太郎の講義を受講していたと思われる。テキストはガーライスの *Enzyklopädie des Rechts*。(法学通論)。成績は「優」であった。

二 1915(大正4)年の春に実施された一中の修学旅行生の「思い出」のなかに、次のような一節がある。「東京で、沖縄県の学生寮明正塾を訪ねた。先輩たちが歓迎して下さいました。一高在学中の佐喜真興英氏が寮歌を歌い、みんなで、その頃流行していた『デカンショ』を合唱したり、一中の校歌も歌って後輩を慰め励まして下さったことが印象に残っている」。<sup>22</sup>

一高の入学前後にすでに肋膜炎の兆候が見られ、また「学友が甚だ乏しい」と思われる佐喜真である。が、彼が一中の校歌や寮歌、デカンショなどを在京学生や一中の後輩たちと一緒に歌って騒いだこともあったことを知ると、なぜかしらホッとす。

それはそれとして、この記事に出てくる「明正塾」とは、文京区小石川茗荷谷付近に建てられた沖縄出身の学生のための寮である。1913(大正2)

<sup>21</sup> 森嶋外『ウィタ・セクスアリス』(岩波文庫、1960年改版)29頁。また、21歳になった小説の主人公は、洋行(ドイツ行き)の辞令をもらい「ドイツ人のところへ稽古に行く。壱岐坂時代の修業が大いに用立つ」と記す。同書、94頁。

<sup>22</sup> 長嶺朝昂「思い出」『養秀百年』(1980年)所収、298頁。

年、つまり佐喜眞が一高に入学した年に完成している。名称の由来については、寮設置の「運動開始が明治で、竣工が大正であったことから命名された」という。初代の寮監は東恩納寛惇。1929（昭和4）年に廃止された。<sup>23</sup>

1915（大正4）年の春といえば、佐喜眞が一高の二年生の頃である。一高は、1935（昭和10）年に目黒の駒場へ移転するまで、文京区の向ヶ丘にあった。入学生に対しては全寮制であったであろうから、佐喜眞は、一中の後輩たちを歓迎するため自治寮から明正塾に出かけ、そこでまた恩師や同郷の友人たちと語り明かしたのだろう。また、佐喜眞が、11歳年長の東恩納寛惇と「明正塾」で出会ったことも推測できる。

おそらく佐喜眞は、一高入学が決まると、玉名館を出て自治寮に入った。そこで一部屋数名の学友たちと寝起きをともにしたことだろう。しかし、そうした一高の全寮主義も、徹底しているのは二年生までで、三年に進級すると緩やかであったようである。実際、佐喜眞と入れ替わるようにして一高を卒業した井川（後に恒藤と改姓）恭も、三年生になると寮を出て、その後、小石川上富坂に建築されて間もない日独学館寄宿舎に移っている。

佐喜眞もまた、帝大入学のさいに提出された「在学証書」に記された彼の「宿所」は、一高の寮ではなく、「小石川上富坂39番地 日独学館方」となっている。そこは寮のある向ヶ丘の近隣にある。おそらく、佐喜眞興英は一高三年時、あるいは遅くとも帝大入学前に自治寮を出て、日独学館寄宿舎に移ったものと思われる。そして、「大正8年秋」に瀧川政次郎と知り合った頃も、まだそこに居る。その後、時期ははっきりしないが、瀧川によれば、「日独学館を出て、私の家の近所」に引っ越すことになる。<sup>24</sup> それらを勘案すると、佐喜眞興英はおそらく4、5年間は日独学館に寄宿していた、と思われる。なお、井川（恒藤）恭、日独学館寄宿舎については後にまた触れる。

三 1916（大正5）年7月、佐喜眞は第一高等学校独法科を卒業する（「官報」第1177号、大正5年7月4日）。「体操」のほか2、3「良」があるが、

<sup>23</sup> 阿波根朝松「明正塾」『沖縄大百科事典 下巻』（沖縄タイムス社、1983年）648頁。

<sup>24</sup> 瀧川政次郎「佐喜眞興英氏の『女人政治考』を読む」（『民族』1巻6号、大正15年）107、108頁。

評点は「平均 優」となっている。大正初期に19歳の青年が沖縄から上京し、勉学に打ち込んでいた跡が窺われる。当時の一高は、他の高校と違って、「官報」にはまだ成績順に掲載されている。「明治末期からは他の高校が官報に発表される卒業生氏名を成績順に公示するのをやめ、いろは順か五十音順に変え、東京帝大なども大正八（一九一九）年以降は追随したなかで、一高だけは昭和十年代まで成績順を守り通した」。<sup>25</sup> また、その「官報」第1177号の記載は、入学時と異なり、「第一部 英法科」「第一部 独法科」「第一部 仏法科」「第一部 文科」「第二部 工科」「第二部 理科、薬学科」「第二部 農科」「第三部 医科」となっている。佐喜眞は「第一部 独法科」を卒業した。

1916（大正5）年7月15日、佐喜眞は東京帝国大学法科大学を受験、9月に入学した（「官報」第1192号、大正5年7月21日）。「入学許可 東京帝国大学法科大学ニ於テ法律学科、政治学科及経済学科ニ入学ヲ許可シタル者ノ氏名左ノ如シ（文部省）」と記された「官報」のその合格者名簿は、学科別ではなく「英吉利語受験者」「佛蘭西語受験者」「独逸語受験者」という区分けで掲載されている。佐喜眞は「独逸語受験者」の欄に氏名が載っている。

東京帝大法科大学では、佐喜眞の入学する2年前から修業年限が短縮され、「法科大学ニ於ケル修学期は三年トス」と改められていた。また、彼の在学中の1919（大正8）年2月7日に公布された「改正帝国大学令」（4月1日施行）によって、法科大学は法学部と改められ、経済学部は独立することになる。

ここで一中時代の同期生たちの進路、動向を追ってみると――。河野国広は五高を卒業して帝大法科大学に合格した。佐喜眞は法律学科で河野は経済学科である。また、佐喜眞はドイツ語受験者で、河野は英語受験者であった。河野は1919（大正8）年7月、経済学部経済学科を「銀時計組」で卒業する（「官報」第2088号、大正8年7月21日）。佐喜眞が1921（大正10）年4月の卒業なので、河野は、佐喜眞より2年早く、修業年限通

---

<sup>25</sup> 秦郁彦『旧制高校物語』（文藝春秋、平成15年）118頁参照。

り3年間で卒業したことになる。河野は銀行に就職するが、彼も若くして肺結核により死亡する。「四力年間、寮生活をしいられ、不自由、規則づくめの広島高師時代」<sup>26</sup>を終了した県費組の呉屋良幸も佐喜眞たちより1年遅れて、帝大文科大学に入学してくる。また、佐喜眞の一期後輩照屋亀三も、佐喜眞の後を追うように、一高、東京帝大へ進学してくる。一中時代の旧友たちが、東京で集うことになる。

三高にいた当間重剛は、そのまま京都帝国大学法科大学に進学する。1915（大正4）年に東京外国語学校英語科本科（現・東京外国語大学）に入学した田場盛義は在学中の1917（大正6）年、外務書記生試験に合格する。「沖縄県初の外交官」の誕生である。<sup>27</sup>彼は、間もなく中国の福建省福州に赴任することになる。上海の東亜同文書院に県費で進学した下地玄信は、そこでも「一番主義」を貫いて首席で卒業し、1916（大正5）年春、中日実業公司に入社後直ちに三井鉱山に出向している。一方、早稲田にいた島袋光裕は、父親を亡くした後、実家の事情で帰郷せざるを得なかった。「私は大学三年で中退しなくてはならなくなった。家には妻子がいるし、男手もないので、一日も早く沖縄に帰れと、母からは矢の催促だった」<sup>28</sup>と述懐している。

## 第4章 日独学館寄宿舎

一 「年譜」では、1916年の欄に「宣教師シュレイダー（ドイツ人）の経営する日独学館（小石川上富坂）に下宿し、ドイツ語を勉強。シュレイダーは、興英を『日本の若き僧侶』と呼んでいた」と記されている。

では、どのような経緯で日独学館が建てられ、またシュレイダーとは如何なる人物であろうか。

かつてのキリシタン弾圧から打って変って、明治6年、キリスト教禁制

<sup>26</sup> 呉屋良幸「私の黄金時代」前掲『養秀百年』所収、279頁。

<sup>27</sup> 田中水絵『風に舞ったオナリ』（凱風社、2011年）25頁。

<sup>28</sup> 島袋光裕、前掲『石扇回想録』、32頁。

が解禁された。明治政府は「文明開化」「脱亜入欧」政策をとる。そうした国策は「欧化主義」とでもいえそうな性質をもつ。鹿鳴館外交に示されるそうした国内の機運もあってか、明治初期に欧米から様々な宣教師がやってきて、「文明国の宗教」を布教してまわり、その結果、入信者が増えていった。しかし、彼等が「キリスト教こそ、あらゆる宗教の頂点に位置するものであり他の宗教はキリスト教に到達する準備段階にすぎない」<sup>29</sup>と捉えるのであれば、仏教や神道といった日本の在来宗教からの反発、摩擦が起こってくるのも当然である。「キリスト教は攻め込んできた立場であり、もともと失うものは何もないのに反して、在来宗教は地盤を奪われるばかりである」<sup>30</sup>からである。

そうしたなかにあって、伝統的教会やそのドグマに固執することなく、キリスト教の教義を相対的に捉え、「聖書を歴史的、批判的に解し、儀式を重んじないプロテスタンティズム」精神にたつ教え、「自由主義神学」が、明治20年代前後から日本にやってきた。そうした「新神学」は、彼等に先だって日本にやって来たカトリックやプロテスタントの各会派、聖書無謬説を主張する心情主義的な、いわゆる「正統主義的キリスト教」の各会派との間に確執を生むことになる。が、ユニテリアン、ユニヴァーサリスト、普及福音新教伝道会といったこの「新神学」の宣教師たちの教えは、当時の知識人や学生に大きな影響を与えた、という。

「普及福音新教伝道会 (Allgemeiner Evangelisch-Protestantischer Missionverein)」は、種々の教派を超えた東洋伝道会であり、それは、1884年にドイツのワイマールで結成された。<sup>31</sup>この伝道会の理念は、たと

---

<sup>29</sup> 高橋昌郎「序論——日本史研究からみた日本キリスト教史」高橋昌郎編著『日本プロテスタント史の諸相』（聖学院大学出版会、1995年）所収、20頁。

<sup>30</sup> 同書、21頁。

<sup>31</sup> ちなみに、ドイツの版画家ケーテ・コルヴィッツの母方の祖父ユーリウス・ルップは「ドイツで最初の自由教団」の設立者である（1846年）。「自由教団は『自由主義神学』の立場から、旧来の教会を離れ、時代にあわせたキリスト教信仰を再構築しようとするもので、キリストの教えには、人間が本来持つべき自由があると主張した」という。志真斗美恵『ケーテ・コルヴィッツの肖像』（續文堂出版、2006年）13頁。

えば次のような規約から窺うことができる。「本伝道会は、キリスト教とキリスト教文化を非キリスト教諸民族の中に、それら諸民族にすでに存在している真理契機と関連させながら、広めることを目的とする」（「普及福音新教伝道会規約」第2条）。また、伝道会の使命を列挙した規約3条には、たとえば「キリスト教以外の宗教の研究を奨励すること」「適当な人物を非キリスト教的諸民族のところへ派遣すること」「非キリスト教世界における一般的な文化的努力（植民地の開発、地理学および民族学その他）を助成し、そこに生きている信者たちの中にキリスト教的観念を養うこと」といった条項が記されている。<sup>32</sup>

二 こうした理念のもとに結成された「普及福音新教伝道会」は、最初の伝道地として日本を選んだ。1885（明治18）年9月、ヴィルフリート・シュピンナー（Wilfried Spinner, 1854-1918）が来日した。この伝道会が派遣した最初の宣教師であった。彼は、来日当初、築地のアメリカ合同教会会堂（ユニオン・チャーチ）を借りて日曜礼拝を、また、独逸学協会学校<sup>33</sup>で宗教の講義などを行っていた。その一方で、自宅を開放してドイツ語による聖書研究会を主宰している。1987（明治20）年2月に彼から受洗した人々が中心となって、新たな教会「壱岐坂普及福音教会」が設立され、同年10月31日に本郷壱岐坂で「会堂献堂式」が行われた。しかし、「もとより彼はそれによって一つの新しい教派を日本につくろうとしたのではなかった」。<sup>34</sup> 永井荷風の母、恒もこの教会に通う熱心な信徒のひとりで、荷風も弟と一緒にこの教会の日曜学校に通った、という。シュピンナー

<sup>32</sup> たとえば、堀光男「独逸普及福音新教伝道会の成立からその日本伝道開始までの事情について」『東洋大学紀要』教養課程篇 第17号（1978年）、4頁参照。

<sup>33</sup> 独逸学協会については、堅田剛『独逸学協会と明治法制』（木鐸社、1999年）が参照されるべきである。この著は「独逸学協会の側から明治法制を再編しようとの試み」であり、普及福音新教伝道会を直接のテーマとしているわけではないが、当時の人的交流や時代背景を知るうえで貴重である。

<sup>34</sup> 堀光男「ドイツの日本伝道と日本のプロテスタンティズム」日本におけるドイツ宣教師研究会編『日本におけるドイツ—ドイツ宣教師百二十五年—』（新教出版社、2010年）所収、168頁。

は、たんに知識人層に伝道するだけでなく、西洋との接触を通じて日本にも紹介された進化論や唯物論と信仰の関係について『六合雑誌』に論文を発表するなど、日本の思想界にも影響を及ぼした。<sup>35</sup> さらに、シュピンナーは同年に「新教神学校」を開校し、神学や哲学、歴史学、またラテン語やギリシア語などをドイツ語で教えることになる。先に記した森鷗外の小説の主人公が入学したという「ドイツ語を教える私立学校」がそれである。ただし、神学校とはいっても、当初は教会内で講義が行なわれていただけであるが、その後、1891（明治24）年に小石川区上富坂町39番地に校舎が建設され、同年9月、落成した。先に示した佐喜眞が帝大入学時に提出した「宿所」と同じ番地である。その間に、伝道会からオットー・シュミエデル（Otto Schmiedel, 1858-1926）夫妻、カール・ムンチンガー（Carl Munzinger, 1864-1937）などが宣教師として日本に派遣されており<sup>36</sup>、また、1908（明治41）年にはエーミル・シュレーダー（Emil Schroeder）夫妻が着任した。

三 1911（明治44）年、上富坂に「小石川普及福音教会」が設立された（1941年に「上富坂教会」と改称）。翌12年には同地に幼稚園が開かれ、シュレーダー夫人が主任として尽力する。さらに1913（大正2）年、同地に日独学館寄宿舎が建設される。佐喜眞が一高に入学した年にあたる。その寄宿舎の責任者がシュレーダーであった。これらの施設は「幼児と母親、また地方から上京した学生らに大きな感化を与え

---

<sup>35</sup> スピンネル「学術と宗教」松本三之介・山室信一校注『学問と知識人』日本近代思想体系10（岩波書店、1988年）所収、285頁以下。

<sup>36</sup> 「普及福音伝道会」の日本での活動について、たとえば「明治16年(1883)に普及福音伝道会は、伝道地を我国と定め、18年にはシュピンナー、20年にはシュミエデル、23年にはムンチンガーが来朝して、我国に於ける自由基督教の発展に貢献したが、布教の傍ら独逸語及び独逸文学の普及に努めるところがあった。その頃学生であった藤代禎輔博士らが斡旋して、ソール・オリエンス（Sol oriens）なる会が出来、独逸文学の話がなされたり、22年10月には、此派の機関誌『真理』が発行され、独逸文学に関する論文も載った。ムンチンガーの『シルラーの尚美教育』もその一つである」とも評されている。鈴木重貞『ドイツ語の伝来—日本独逸学史研究—』（教育出版センター、1975年）172頁。

た。のちの東京都知事安井誠一郎はこれらの事業を助けたひとりである」<sup>37</sup>といわれている。

佐喜眞は、遅くとも帝大入学前には「新教神学校」に付置された日独学館の寄宿舎に移り住んでいる。ちなみに、シュレーダー夫妻が帰国したのは1921（大正10）年であり、その年には佐喜眞も帝大を卒業している。また、シュピナーが開校した「新教神学校」の最初の学生、三並良が一高でドイツ語を教えていたことは先に触れた。第一部丙類（独語法律科）専攻であった佐喜眞が一高で三並良と出会っていたかどうか確認できてないが、日独学館ではシュレーダー牧師から、日常的にドイツ語のみならず宗教全般にわたった話を聞く機会があったことだろう。佐喜眞のことをシュレーダーが「日本の若い僧侶」と呼んでいたと「年譜」で記されているのも、日々の生活を共にする寄宿舎での二人の間柄を窺わせる。

1933年の瀧川事件（京大事件）で京大法学部を辞した七教授のひとり恒藤恭は、1910（明治43）年9月に第一高等学校第一部乙類（英文科）に入学、1913（大正2）年7月、卒業した<sup>38</sup>。佐喜眞と入れ替わりということになる。井川（恒藤）恭は一高時代の2年間は自治寮で過ごす、三年生になって弥生町の下宿に移り、そして最後の学期を日独学館に居住していた。井川（恒藤）の「日記」によって、彼が1913（大正2）年4月12日に日独学館寄宿舎に移ったことがわかる。彼は新築なったその寄宿舎の最初の入居者たちのひとり、ということになる。実際、引っ越し当初は台所が使えず、「二、三日は、シュレーデルさんのところから朝飯夕飯がたいてきた」<sup>39</sup>という。その後も、シュレーダーに連れられて東郷坂の教会に出かけたり、居宅での食事に招かれるなど、寄宿生とシュレーダー

<sup>37</sup> 尾藤俊一「シュレーダー」『日本キリスト教大事典』（教文館、1988年）666頁。

<sup>38</sup> 恒藤と芥川龍之介との生涯にわたる交友は夙に知られている。恒藤が一高卒業後、文科ではなく京都帝国大学法科大学に進学した理由のひとつに「非凡な彼（芥川のこと—引用者）の文学的能力に接触したことから私自身の能力の限界を知り、文学への志を放棄して、大正二年に一高を卒業した後、方向を転じて京都大学の法科に入学した」と記している。恒藤恭「わが青春時代の生活」山崎時彦編著『恒藤恭の青年時代』（未来社、2003年）所収、167頁。

<sup>39</sup> 大阪市立大学大学史資料室編『向陵記—恒藤恭 一高時代の日記—』（2003年）409頁。

夫妻とが日常的に親しく交流していたことが推察できる。

「日独学館は何らの制限もない、まったく自由な寄宿舎であった。毎朝シュレーデルが隣の自宅から学館に来て、オルガンを弾きながら讃美歌をうたい、説教したらしい。いわゆる早天礼拝である。しかし、それも出席は自由であった」。<sup>40</sup>

佐喜眞もまた、卓球や敷地内にあったコートでテニスを楽しみ、時折、シュレーダーの説教を聞き、オルガンの音色に聴き入っていたはずである。また、数年間もその寄宿舎で生活したとなれば、佐喜眞は、キリスト教や仏教だけでなく、琉球固有の土着信仰やその歴史、彼の構想する「女人政治」などについても、シュレーダーや後に触れるフンチカー牧師と話し合っていたであろう。<sup>41</sup>

四 「普及福音新教伝道会」の理念、その使命を記した条項を先に挙げた。伝道会から派遣された宣教師たちの最終目標は、もちろん、「唯一の啓示ではないが、完全な啓示である」イエス・キリストの教えを伝道することにあった。しかし、先の規約第3条にみられるように、伝道会の使命のなかに「非キリスト教世界に所与として存在している諸宗教、諸文化を否定するものではなく、むしろそれらを研究し、その中にあるキリスト教的真理と矛盾しない諸価値を見極め、発展させるということが目論まれている」<sup>42</sup>と指摘されている点は重要と思われる。実際、たとえばム

---

<sup>40</sup> 関口安義「反骨の教育家 評伝 長崎太郎 I」(『都留文科大学研究紀要』第63集、2006年)75(92)頁。また、そこでは、日独学館は一高のドイツ語教師三並良とシュレーダーとの「共同経営」で、「三並は温厚な人格者であり、自由キリスト教の立場に立ち、包容力のある考えの持ち主であった」とも記されている。

<sup>41</sup> 2013年5月下旬、私は「山上国際学寮」(かつての「日独学館学生寮」)を訪ね、佐喜眞が寄宿していた当時の「入寮者名簿」といったものが現存するのかどうか尋ねたことがあった。結局、不明のままであるが、その折に、寮長の岡田恭子さんには忙しい中、丁寧に応じていただいた。また、その後も『富坂キリスト教センター 紀要』などをお送りくださる等、そのご好意に対し、岡田恭子さんまた富坂キリスト教センター総主事の岡田仁さんに深く感謝申し上げます。

<sup>42</sup> 川島堅二「普及福音新教伝道会とドイツ語圏人類学」掲掲『日本におけるドイツドイツ宣教師百二十五年一』所収、93頁。

ンチンガーは、帰国後、*Die Japaner. Wanderungen durch das geistige, soziale und religiöse Leben des japanischen Volkes.*（『日本人 — 日本民族の精神的、社会的、宗教的生活への旅』）という著書を公刊し、日本人の精神構造、家族生活や道徳規範、宗教生活などを分析、紹介している。<sup>43</sup> そうした点を踏まえ、「19世紀末に日本に宣教師を派遣し、日本の近代化にも少なからぬ影響を与えた普及福音新教伝道会の活動は、こうしたドイツ語圏の人類学の影響を少なからず受けているのである」といった指摘がなされている。<sup>44</sup>

そうした居住空間のなかで、佐喜眞は寝起きをし思考を積み重ねていった。そこから帝大図書館に通い、大学では穂積陳重に教えを受けることになる。『女人政治考』が育っていく苗床は、あるいはこの日独学館にあったのかもしれない。

後年のことになるが、柳田國男の大正11年6月17日の「日記」には、こう記されている。「早朝船はメッシナの海峡に在り。ストロンボリ火山の麓近く過ぐ。海静かにして晴れたり。荷物をかたづけ始む。夜瑞西人フンチカー氏と談る。此人佐喜眞興英君の友人、教師として暫らく日本に在り、今度家族を連れてチューリッヒに還るよし。處番地などをこの手帳に書いてくれる」。<sup>45</sup>

柳田は、当時、ジュネーブで国際連盟の仕事に携わっており、「余暇が多い」その仕事の合間を見て、近郊を旅していた。彼はその旅の途上でフンチカーと出会った。大正11年といえば、その前年5月に司法官試補に任用された佐喜眞が、約10ヶ月間の福岡地方裁判所での事務修習を終え、翌1922（大正11）年3月に東京に戻った頃である。履歴書の同年3月18日の欄には「東京地方裁判所及同検事局並東京区裁判所及同検事局ニ於テ

---

<sup>43</sup> リチャード・ジッブル「明治時代のドイツ人宣教師の日本観 — C. ムンチンガー著 *Die Japaner*『日本人』についての一考察 —」（『アカデミア 文学・語学編（64）』南山大学、1998年）225頁以下参照。

<sup>44</sup> 川島、前掲論文、95頁。

<sup>45</sup> 柳田國男「瑞西日記」『定本 柳田國男集 第三巻』（筑摩書房、1968年）所収、253頁。

事務修習スヘシ」と記されている。

柳田が船上で会ったスイス人ヤーコプ・フンチカー (Jakob Hunziker) もまた、「普及福音新教伝道会」が日本に派遣した宣教師であった。<sup>46</sup> 彼は1914 (大正) 3年に東京に着任し、シュレーダーが帰国した翌年の大正11年にスイスに戻る。帰国のために乗船したのが、偶々柳田の乗った船と一緒だったことになる。二人は、学生時代の佐喜眞の様子や、フンチカーが日本を去る直前の佐喜眞の研究などを、シチリア島の北方ストロンボリ火山からあがる噴煙を眺めながら語り合ったのだろうか。

五 「私の家庭生活をふりかえるとき、読書の恩恵は実に大きく、考えさせられることが多い。ゼネシス (「創世記」のこと—引用者) からはじめて一章一章『聖書』を判事の彼と共に読んでいった。静かに神の道を求め、人間の存在価値を知った。(略) 東京小石川の教会で私は洗礼をうけ、遂に本を読むために生涯の伴侶と結婚した。二人には子供がなく、三十三才で逝った夫に三冊の遺著があり、私も数冊の本を出版した」。<sup>47</sup> 永原マツヨは「時折の随想を纏めた」一冊に、こう綴っている。

永原は、1898 (明治31) 年、佐賀で生まれた。警察官だった父親の転勤に伴い、小学校時代に6回も (7回と記された箇所もある) 転校を繰り返した。度重なる転校によって級友がなかなか出来にくかったであろうことは想像できる。そうした少女時代に味わった孤独の中で、彼女は、読書のよろこびを知るようになる。佐賀師範学校へ進学した頃は、宗教と哲学の本を愛読し、なかでも「心のよりどころとなったのは聖書と『菜根譚』であった」という。その後、大阪婦人新報記者時代を経て、上京する。「永原マツヨ先生 年譜」によると、1922年の欄には「1922 (大正11)

---

<sup>46</sup> フンチカーに関しては、中沢治樹「瑞西普及福音新教伝道師 J. フンチケルについて」(前掲『日本プロテスタント史の諸相』所収) が詳しい。そのなかで、彼と内村鑑三や塚本虎二との関わりなどが、フンチカーの子息から中沢に贈られてきた内村の「ハガキの原本」などを紹介しながら論じられている。

<sup>47</sup> 永原マツヨ『あすなろう』(永原学園、1971年)、75頁。

年 上京する。バイブルスクールに通学する。小石川福音教会で洗礼を受ける。聖書研究会で沖縄出身の佐喜眞興英と知り合う。同年12月、興英と結婚。本郷の小石川植物園裏の住居で家庭生活に入る」<sup>48</sup>と記されている。

バイブルスクールとは日独学館のことであろう。また、1922（大正11）年といえばシュレーダーはその前年に帰国しているので、永原マツヨは、フンチカーか、あるいは同年に再び日本に来て、小石川教会の牧師をしていたグンデルト（Wilhelm Gundert, 1880-1971）から洗礼を受けたものと思われる。

「結婚した二人は、ドイツ人の経営するアパートを新居とした。そこは現在の文京区小石川の原町にあって、東京大学の小石川植物園の裏の閑静な住宅街にあった」という。<sup>49</sup> 佐喜眞が帝大入学前から数年間、日独学館寄宿舎にいたことは先に述べた。彼は、卒業後十ヶ月間の福岡地方裁判所勤務を経たのち東京に戻ってくるが、その時もまた、住み慣れた小石川の日独学館の近くで生活していたことがわかる。また、マツヨの結婚生活は「午後は小石川福音教会婦人部に英語のおけいこを一つの目的として、聖書を習い家ではIさんに経済学を夫に民族学、考古学等をと好きなままに読むことができた」<sup>50</sup> というものであった。

振り返れば、佐喜眞が一中にいた前後の「回想記」には、英語の達者な学生の話がしばしば出てくる。それについては、当時、外国人宣教師たちが一中で英語の授業を担当していた影響も大きいだろう。しばしば引用さ

<sup>48</sup> 『永原学園創立五十周年記念誌』（1996年）、642、643頁。

<sup>49</sup> 同書、621頁。但し、宮良當壯の日記によれば、大正11年11月28日に「小石川林町に佐喜眞興英氏を訪ふ。初対面なれど旧知の如き感ありて直に民族研究論を初めぬ」とある。『宮良當壯全集 20巻』（第一書房、1984年）341頁。マツヨの記す「ドイツ人の経営するアパート」というのが不明であるが、先に触れたフンチカーもまた、彼は「主として東大の学生のために寮を作って、毎朝日本語とドイツ語で礼拝を守り、1週間に2回ドイツ語を教えた」という。中沢治樹、前掲論文、258頁。フンチカーも小石川の上富坂に居住していた。仮に、マツヨのいうアパートがそれだとすれば、佐喜眞夫妻はフンチカーの経営する寮に住んでいたことになる。

<sup>50</sup> 永原マツヨ、前掲書、18頁。

れるエピソード、「佐喜真と下地玄信は、校内では英語以外では話さない約束をした」といったことから窺えるように<sup>51</sup>、実際、二人は英語を得意としていた。もともと沖縄の風俗、宗教に関心のあった佐喜真は、宣教師の授業を通して、キリスト教にも関心を持ったと思われる。一方、マツヨも佐賀師範時代の「日曜の午前には佐賀市内の教会に出かけ、宣教師のピーク氏から聖書の講読を受けた」<sup>52</sup>という。

しかし、それにしても何故、上京したマツヨが、日独学館に「小石川普及福音教会」に向かったのか、という点は不明である。<sup>53</sup>

ところで、小石川の原町といえ、荒木郁子の姉、滋子が当時住んでいた町である。「滋子伯母は萬朝報の記者をしながら小石川の原町に小さい駄菓子屋を開いておりました。滋子伯母は未婚の母で道子という子供が一人おりました。道子はいつも独りだったようです」という、郁子や滋子の姪にあたる敬子さんの思い出が紹介されている。<sup>54</sup> 滋子もまた、佐喜真や島袋光裕が玉名館に投宿していた頃、そこを手伝っており、『青鞥』にも小説を発表している。佐喜真にとっては顔見知りであっただろうし、婦人問題や社会事象に関心が強かったマツヨも荒木滋子の書いた小説を読んでいたと思われる。実際また「佐喜真は結婚後その妻松代を婦人運動のなかに積極的に参加させるように働きかけている。松代は佐喜真のすすめで、市川房枝、河崎ナツ、荒木郁子らの婦人運動の集会に参加している。佐喜真は妻松代を弁護士にする積りでいたようである」<sup>55</sup>といった指摘もある。

---

<sup>51</sup> 私には、しかし、このエピソードの影に、当時の一中生が「方言罰札」におびえながら学校生活を送らざるをえなかった背景をも感じてしまう。中頭郡、宮古郡から入学し、一中で優等生たらんことを目指す二人にとって、「方言罰札」は避けなければならないものであった。

「方言札は漢那少将在校時代のストライキ事件の原因となった英語廃止論と共に沖縄教育史の二大汚点であろう」という指摘がある。阿波根朝松「あの頃この頃」前掲『養秀 創立八十周年記念』所収、136頁。なお、拙稿「(資料) 明治末期の中学校教師『山口泰平日誌』を読む」(『うるまネシア』第17号、2014年) 134-143頁、参照。

<sup>52</sup> 前掲『永原学園創立五十周年記念誌』、617頁。

<sup>53</sup> 佐喜真と永原マツヨとの出会いにつき、拙稿、前掲「郷土の法学者 佐喜真興英の生涯」、280頁以下参照。

<sup>54</sup> 中尾富枝、前掲書、27頁。

<sup>55</sup> 我部政男、前掲論文、506頁。

ちなみに、「子供の道子」とは、YWCA の職員や帝大図書館員を経て、1938（昭和 13）年、文学座研究所を卒業した女優の荒木道子であり、また、荒木一郎の母親である。荒木道子は、1960 年代前半、沖縄でもテレビが普及し始めた頃の人気テレビドラマ「ただいま 11 人」で山村總と夫婦役をしていた。彼女は 1917（大正 6）年の生まれなので、島袋や佐喜眞が玉名館にいた頃はまだ生まれていない。佐喜眞夫妻が原町に住んでいた頃、近所を散歩した折、ひとりで遊んでいる道子を見かけ、二人で声をかけたこともあったのだろうか。

佐喜眞夫妻は、瀧川政次郎や南雲等と「心から互いに親しみ、尊敬しあった」なかであったが、とくに佐喜眞の親友「英法出身の I さん」は佐喜眞とマツヨの住み処に頻繁に出入りした。マツヨは彼から経済学とエスペラントを学んだ。「小石川の家は結局友人二人で住んでいたようなものであった。私は主婦としての踏み出しを家事に煩わされず、二人の友情の中にその月々を暮して」いた。しかし、この友人 I は、間もなく若くして亡くなってしまふ。それはまた、元来身体の弱かった佐喜眞にも、自らを省みて強い衝撃を与えたことだろう。その「言いようのない悲しみ」のなか、「友人の死後東京の生活から一刻も早く逃れ転勤したいと願い出て、大阪、岡山―津山の区裁と夫の健康第一にと移っていった」とマツヨは綴っている。<sup>56</sup>

佐喜眞は、1923（大正 12）年 5 月 12 日、大阪地方裁判所勤務の辞令を受ける。<sup>57</sup>

---

<sup>56</sup> 永原マツヨ、前掲『あすなろう』18 頁。なお、永原マツヨ『続・歌ごころ ― 孤独に耐へる ―』（1974 年）所収の歌には「伊東氏は英法なれどはやく逝き南雲氏も亡く法曹界誌を辿る」と詠まれている。同書、167 頁。

<sup>57</sup> 1923（大正 12）年 3 月に判事に任用された佐喜眞は、同年 5 月には、東京地裁から大阪地裁に移り、さらに、ひと月も経たぬうちに（6 月 5 日付）、岡山地裁津山支部判事へと勤務地を移している。

